

幼稚園の「社会」について

斎藤敏夫



1 或る日のプログラムを追って

幼稚園の教育内容の中、「社会」の領域ほど複雑なものはない。それは小学校のように細かく分科されていないところに、その複雑性があるのかもしれない。

小学校では、教科の中の社会科があるほか、道徳があり、特別教育活動があり、学校行事などがある。このほか教育思潮の発達にもなつて、教科学習以前の諸問題が論議されていることを見逃してはならない。例えば生活指導の問題がある。生活指導と教科学習、道徳または特別教育活動、学校行事などの関連を、簡単に割り切ってしまうことにも危険がある。また他方には、望ましい学級を形

成することによって、学級の子どものたちの学力が向上するばかりではなく、最も望ましい人間形成がなされるといふ、いわゆる「学級づくり」の問題がある。

幼稚園の「社会」は、小学校の社会、道徳、特別教育活動や学校行事などの外、これらの重要な諸問題、つまり最近の小学校教育において、特に喧しく論議されているような内容も含んでいるように思われる。

しかしながら、ここではこれらの点について触れることはさけ、毎日の教育活動の中で、「社会」の領域と考えられる内容のものが、どの程度含まれているかを、具体的に考えてみたい。

次に示すプログラムは、N幼稚園の五歳児の或る組の、一月下旬の或る日のプログラムである。

九・〇〇 登園・健康しらべ。

自由遊びⅡ大積木・絵本・絵画など(ストープに注意)

して遊ぶように)

九・三〇 あいさつ・話し合いⅡその日のできごと 他。

―リズム遊び―

・つみ木遊びⅡ「つみ木」の歌によって表現遊びをする。

○ゆうびんごっこⅡ「クシコスのゆうびん馬車」のリズムに合わせて。

一〇・三〇 うがい・肝油服用(順序よく)

―ごっこ遊び―

○ゆうびんごっこ

・話し合いをする。

・ゆうびん局でみてきたこと。

・どんな係がいるか。

・グループに分れてしなくをする。

・ゆうびん局の人Ⅱポスト・スタンプ・かんばん

・切手など。

・あつめる人とはいたつする人Ⅱかばん・三輪車。

・手紙をかく人Ⅱ二人一組になって絵や字をか

き、交換できるように配慮する。

一一・三〇 ゆうびんごっこをする。

・終わった後の話し合いをする。

一二・三〇 給食のしたくⅡ用便、うがい、手洗い、消毒(ゲル

Ⅰブごとに順序よく)

給食Ⅱ栄養のお話、レコードをきく。

休息Ⅱ静かに絵本をみる。

お話Ⅱ「ボン子ボン太郎」

婦りのしたく

一・三〇 あいさつ、下園帰宅

(注)

この週の主題による活動は「ゆうびんごっこ」である。

さて、この一日のプログラムを内容的に分析してみると、どの活動の中にも「社会」の経験内容が含まれていることは、明らかであろう。

しかしながら、五歳児の一月下旬といえば、幼稚園教育の終末に近い段階にあるので、それらの内容の大部分は、その学級経営が望ましく行なわれている限り、または特別な事態が生じない限り随時に随所で指導すべきことがらであろう。

例えば、登園直後におきる「自分の持ち物の整理」などは、入園当初の或る期間の中に、懇切な指導を行なっておくべきことであり「友だちと仲よくする態度や能力」なども、その発達段階に応じて、当然に指導が加えられているべき事からであろう。

しかしながら、このデイリープランでは、主題活動として、「ゆうびんごっこ」を取り上げている。この「ゆうびんごっこ」の中で培われるべき要素には、どのようなものがあるかを考えてみたい。

(イ) 先ず「ゆうびんごっこ」の本命ともいふべきものは、教育要領の12頁に示されている。人々のために働く身近な人々を知り、親しみや感謝の気持ちをもつことを、郵便配達のはたらきや、郵便局のようすを見ることを通して、得ることであり、さらに「ごっこ遊び」を通して、これを確かなものにするのである。

(ロ) 続いて考えられることは、この時機に達すれば、小グループの中にあって、初歩的な段階にあるとはいえ、リーダーの役割を果たすことができるであろう。またリーダーを中心として、皆で協力することもできるであろう。

さらに、グループの中の小さな問題を、グループの中で解決する力も芽生えてくるであろう。最後に、他と手紙をやりとりしたり、お互いに関連のある仕事をしたりすることによって、グループ間の交流も行なわれるであろう。

(ハ) 物に対しての内容としては、廃品を利用して必要な用具を作ったり、その役目に応じた用具のはたらきをわきまえたり、またはこわれたものを、自分たちで修理したりするはたらきも期待される。また、必要な用具を作製するに当っては、完成にまで努力しなければならぬような場面が出てくる。

(ニ) 最後に、ごっこ遊びを通して、遊びのきまりを確認し、そのルールに従って遊ぶことも、大切な要素の一つとなるであろう。

2 幼稚園の「社会」

幼稚園教育要領の中に示されている幼稚園教育の具体目標をみると、2(3頁)として「幼稚園内外における身近な集団生活に適應できるようになる」として、いくつかの経験内容にあたる項目が挙げられている。これを「社会」における教育内容の「望ましい経験」の諸項目と照合すると、その順序とか組合わせとかには、多少の異同があってもほぼ合致するように見受けられる。

このことから「社会」の総括的な具体目標は「幼稚園内外における身近な集団生活に適應できるようにする」とことと考えて、誤りがないように思われる。

そして、ここでいう「身近な集団生活」ということは「適應」という概念の範囲を示しているものである。

すなわち「望ましい経験」の1から5までのことは、多少は家庭的なことがあっても、主として幼稚園内において考えられることであるが、6、7、8は幼稚園・家庭および社会にまで及ぶものである。

また「適應」という概念の内容を、「望ましい経験」内容から眺めると、必ずしも一元的ではなく、何か構造的に考えた方が整理し易いように見受けられる。

例えば、「望ましい経験」の1、2、は質的な差異はあるにしても、その発達段階に応じて「個性の実現」に通ずるものである。そして5、は学級集団の他の子どもたちとの関係を示したものであり、4、は物に対する経験内容である。そして3、は集団生活の中の民主的な基本から出発した技術的なものとしての「きまり、約

束」に属する経験と考えられる。

さて、このように考えてきても、未だに的確な構想団は浮び出してこない。そこで、それぞれの幼児たちの個性的な発達段階を、ふまえながら、適応し得る最初の段階を考えてみたい。この段階における幼児の状態は、安定した情緒を獲得して、いきいきと個性的な活動ができるような状態ではなかるうか。

このような状態は、いうまでもなく保育室や幼稚園の環境設定の上に、細かな配慮が払われており、家庭的な親和感が満たされていることが、一つの条件になるかもしれないが、それ以上に大切なことは、担任教師と子どもとの関係におけるはたらきである。担任教師が、子どもに対する深い愛情と見識の上にたった、子どもを洞察し理解する力と、それにとまなうすぐれた指導技術とが、大きなはたらきをもつものである。そして、このような状態の上になつて、はじめて「学級づくり」といわれる仕事はじまるといってよい。

幼児たちが、いきいきとした個性的な活動ができてこそ、友だち関係が望ましく調整されるきっかけが得られ、物に対する対し方や扱い方が指導され、きまりや規則に対する理解が深まり身についてくると思われる。

さて、このように「社会」の目標を「身近な集団生活への適応」というように捉え、これをやや分析的に考えてくると、この目標は幼稚園の教育方針に密接な関連をもつものであり、学級経営方針に直結するように考えられる。したがって、すべての活動の場で、す

べての機会をとらえて、適切な指導内容が押さえられていかなければならないことになる。

ただ、ここで付言しておきたいことは、「のぞましい経験」の6と8にわたる内容については、適切な「ごっこ遊び」とか「構成活動」とかを計画したりすることが考えられ、行事などに関しては、その行事の性格や規模の大小によって、適切な扱い方が計画されるべきであろう。なお、このような場合にも、節々で例示したように、1と5の内容を押しえておくことは当然である。

3 結 び

N幼稚園では、幼稚園の指導計画を改善するに当って、「幼児の発達の傾向が著しい時機」を検討し、各期の幼児の特性を書き上げてみたところが、最初の段階では、その内容がほとんど「社会」の内容に通ずるものであった。

これは、民主的な社会の一員としての人間形成の場である幼稚園としては、当然のことであるかもしれない。

現行指導要領以前の小学校の社会科が、教科としての社会科の内容以外に民主社会における道徳や、学習以前の生活指導的な内容をさえも包含していた時代があった。

現行の幼稚園の「社会」は、これ以上の内容を含んでいるように思われる。これを明らかにして、よい教育を実施していきたい。

(東京都千代田区立小川幼稚園長)